

## ヤン・ド・フリース「スケールで戯れるーグローバルとマイクロ、マイクロとナノ」

Jan de Vries, “Playing with Scales: The Global and the Micro, the Macro and the Nano”, *Past & Present*, 242, Issue Supplement 14, 2019, pp. 23–36.

### 紹介

同論考は、『過去と歴史』誌の 2019 年の特集号「グローバルヒストリーとマイクロヒストリー」に掲載された論文である。グローバル・マイクロヒストリーの最新の展望が、理論的な観点から論じられている。

『過去と歴史』2019 年特集号の視点

- ・マイクロヒストリーとグローバルヒストリーの溝を埋める。
- ・両者の視点は敵対関係ではなく、同じ試みを構成する異なる部分であり得る。
- ・また両者を結びつけることで歴史学は豊かになり得る。

### 1. ミクロヒストリー<sup>1</sup>と「広義の」ミクロヒストリーの特徴 (pp. 23-27)<sup>2</sup>

#### ○ミクロヒストリーの特徴

- ・ジョヴァンニ・レヴィの見方では「スケールの縮小」。
- ・マクロの歴史の視点では見ることのできない大きな歴史過程の諸々の相を観察する。
- ・観察対象をできるだけ十分に文脈化し、文書史料に基づく見事な名人芸を披露する。

#### ○広義のミクロヒストリーの特徴

- ・ミクロヒストリーを「文化論的転回」に結びつける。
- ・ミクロヒストリーと文化史の中心にあるのは、大きな物語を転覆させること。

#### ○二つのミクロヒストリーが存在する

##### ①断片から「普遍的なプロセス」を観察しようとするミクロヒストリー

→イタリアタイプ

---

<sup>1</sup> microhistory の日本語表記については、1970 年代にイタリアで誕生した歴史学の特定のアプローチであるという経緯を踏まえて、これまでのレポートでは「ミクロストリア」と表記してきたが、この表記は今後イタリアにおけるこのアプローチの源流を示す場合に限定し、そうでない場合は「ミクロヒストリー」と表記する。

<sup>2</sup> 章のタイトルや○の小見出しはレビュー担当者が付した。

②「普遍的なプロセス」や一般化された主張を否定するマイクロヒストリー。

→文化論的、言語論的転回タイプ

○イタリアにおける源流・・・①に対応

- ・歴史家が観察する場は社会的に構築されており、複数のつながりが交差する歴史の実験室として役立つと考える。ジョヴァンニ・レヴィによれば、歴史学は一般的な問いとそれに対する特定の答えからなる学問であり、そうした問いや答えは機械的なモデルではなく、史料の内部に見出されるものにより生み出される。
  - ・マイクロヒストリーの方法は社会理論と相互作用している。
  - ・社会的行為をマイクロのレベルで調査することにより、歴史家は規範的な現実と取り組む個人を観察する。それによって歴史家は社会的自由と社会的束縛に関する新しい理解の基礎を得ることができる。
- このようなレヴィの方法は、ある点においては今でも魅力的なアジェンダであるが、今日のマイクロヒストリーの主流からは遠く離れている。

○文化論的、言語論的転回に適応したマイクロヒストリー・・・②に対応

- ・マイクロヒストリーはイタリアの外部で歴史学の危機に対する解決策として用いられ、文化論的転回、言語論的転回、新しい文化史といった動向と関わることになった。
  - ・マイクロヒストリーを歴史学におけるポストモダニズムの道具とする歴史家もいた。
- こうした歴史家は、研究対象の場や人の独自性を本質化することで、グラント・セオリーはもちろんのこと、別の研究対象との関係（交換や接続）について物語る可能性を完全に否定した<sup>3</sup>。
- しかしながら、このような主張をした歴史家たちがその主張通りに実践することはめったにない。

○昨今有力なマイクロヒストリー

- ・このタイプのマイクロヒストリーは、文書史料の名人芸(*archival virtuosity*)や共感的な物語り(*empathetic storytelling*)、またトニオ・アンドラーデが推奨する「モデルに現実の人々を住まわせること」(*populating our models with real people*)に注目することで、〔ポストモダンの〕理論家たちの厳しい批判を和らげる方向に進んでいる<sup>4</sup>。
- ・こうした戦略によって、マスター・ナラティブに不信を表明したポストモダンの理論家たちに表向き敬意を払いつつ、歴史学の物語り (*historical narrative*) を再び採用す

---

<sup>3</sup> 著者が注で挙げているのはマグヌソンである。歴史学分野文献レビュー⑧を参照。

<sup>4</sup> Tonio Andrade, "A Chinese Farmer, Two African Boys and a Warlord", *Journal of World History*, 21, 2010, p. 574.

ることができるようになる。

- ・ジョン・ブルーアはマイクロヒストリーのこの大きな潮流を「隠れ場的」歴史学(‘refuge’ history)と呼ぶ<sup>5</sup>。
- ・ジャック・ルヴェルによれば、進歩はもはや保証されているようには見えず、現在は不確かであり、未来は不明瞭である。その結果、過去が投資すべき安全な場所となった。人々が歴史に求めているのは教訓でも先例でも現在を理解するための方法でもなく、現在の不確かさに対する隠れ場である<sup>6</sup>。
- ・マイクロヒストリーは一般に、これまで周縁的であった個人や集団に関して、共感的な語りの形式を取る。

## 2. ミクロとグローバルの接続 (pp. 27-31)

### ○大きなスケールの歴史（グローバルヒストリー）の復権

- ・リン・ハントによれば、「グローバリゼーション・パラダイムは、文化理論が批判してきた前提そのものを再び主張しているのであって、そのため文化史の過去数十年の成果が洗い流されてしまう危険が潜在的に存在する」<sup>7</sup>。
- ・ハントはグローバルヒストリーとグローバリゼーションを互換可能なものとして語り、グローバリゼーションと近代化を融合し、グローバリゼーションをパラダイムの地位にまで押し上げる。  
→だが、著者によればこれらはすべて疑わしい。
- ・著者によれば、グローバルヒストリーが生んだもっとも影響力ある物語りの構造は「大分岐」(great divergence)であった。
- ・この議論の提唱者たちは、近代化論のカギとなる前提を否定し、「西洋の台頭」を説明するのに役立つ社会理論のヨーロッパ中心主義的な規範を批判しようとしてきた。
- ・グローバルヒストリーは、恐ろしいグローバリゼーション・パラダイムの内部に匿われているのではなく、むしろ野心的な歴史学と見なされるべきである。だが、その目標を達成するための共通の方法論やマスター・ナラティブは欠けており、グローバルヒストリーがこれからどのような形になるかは未解決の問題。

---

<sup>5</sup> この点に関しては、ジョン・ブルーア（水田大紀訳）「マイクロヒストリーと日常生活の歴史」『パブリック・ヒストリー』2号、2005年、22-23頁、を見られたい。

<sup>6</sup> Jacques Revel, “Introduction”, in Jacques Revel and Lynn Hunt (eds.), *Histories: French Constructions of the Past*, trans. Arthur Goldhammer, New York, 1995, p. 34.

<sup>7</sup> Lynn Hunt, *Writing History in a Global Era*, New York, 2014, p. 59 [長谷川貴彦訳『グローバル時代の歴史学』岩波書店、2016年]。

○グローバルヒストリーの問題

- ・だが、カルチュラルスタディーズの環境で育った歴史家たちが次のような不安を感じるのには理解できる。グローバルヒストリーの大きなスケールは、理論や構造主義と自然な親和性があるのではないか。それが技術的になり概念的な定義を必要とする可能性はないか。
- ・歴史家はこのような運命を避けて、グローバルヒストリーの柔軟な形を維持したまま、新しい研究戦略を展開することができるのだろうか。つまり、グローバルなテーマとマイクロヒストリーの方法論を接続する戦略は可能なのだろうか。
- ・この問題が歴史家たちの注目を浴びている。なぜなら、これがグローバルな射程を有する歴史記述において、人間の行為主体性を回復し、偶然性や主観性への余地が残される唯一の方法だと信じられているから。
- ・とはいえ、構造と行為主体性の問題は容易には避けることができない。

○「普通ではないコスモポリタンな個人」(UCIs: unusually cosmopolitan individuals)

- ・今日のマイクロなグローバルヒストリーが UCIs に注目しているのは、個人の経験というプリズムを通してグローバルな力を明らかにするためである。
- ・UCIs は、イタリアのミクロストリアにおける「正規なる例外」に相当する<sup>8</sup>。
- ・しかし、UCIs には大きな問題がある。マイクロヒストリーがグローバルな視野をもたらすカギ穴として役立つのに対して、十分な記録が残されている UCIs は歪んだ視野をもたらす可能性がある。なぜなら、国外で成功を収めて生きる人たちは、擬装と自己成型(to dissemble and self-fashion)をあまりにもよく学んでしまっているため。そのため、UCIs への注目は、グローバルというよりも、彼らの故郷やローカルヒストリーに連れ戻されがちになる。

○ズームインとズームアウト

- ・研究のスケールを所々変更する(ズームインしたりズームアウトしたりする)ことで、グローバルレベルの分析と、文書史料をベースにしたマイクロな研究をつなぎ合わせることが主張されている。
- ・この魅力的で希望にあふれた提案は、かなり疑わしいが暗黙の前提になっている。
- ・著者によれば、この方法は魅力的だが空想にすぎない。
- ・この方法の前提は、同じ対象を異なる解像度で眺めること。大きなスケールでは見えなかったものが、小さなスケールでは姿を現すことになる。
- ・だが、マイクロな研究が集まればグローバルヒストリーになるというわけではないので、現在のマイクロヒストリーの歴史家のレパートリーには、スケールの移動を可能に

---

<sup>8</sup> 歴史学文献レビュー⑦を参照。

するいかなる道筋も、方法論も理論的な枠組みも存在しない。

- ・もしそのような理論的な枠組みがあったとすれば、マイクロヒストリーは「ケーススタディ」になっていただろう。

#### ○ケーススタディとはなにか

- ・ケーススタディは、必ずしも数量的である必要はないが、理論的な枠組みに依拠し、ケーススタディ間の比較可能性を高めるリサーチ・デザインに依拠している。そのため、ケーススタディは大きなスケールの歴史研究と結びつく。
- ・しかし、これらはマイクロヒストリーの精神や目的に反する。
- ・マイクロヒストリーの歴史家は理論的な主張をすることもできるが、彼らはそれをユニークな事例の力を用いて直接的におこなう。この力は歴史家による過去の行為者との共感や同一化、また過去と現在の差異や距離を破壊する連帯から引き出される。
- ・このような「隠れ場的」歴史学の強みは、外的な基準を主題の解釈に適用するのではなく、主題に近づき、主題の内部から見る点にある。リン・ハントによれば、ア・プリオリなカテゴリーではなく、「厚い記述」に基づく、下からの一般化が目指されることになる。
- ・ジョヴァンニ・レヴィは、史料を「ページの端を越えて」(‘beyond the edge of the page’)読むことを勧めている。  
→だが、ア・プリオリなカテゴリーや社会理論にまったく染まっていない歴史家が、ページの端を越えて読むとはどういうことなのか。

### 3. 共時的なアプローチと通時的なアプローチの接続 (pp. 31-32)

#### ○マイクロヒストリーとグローバルヒストリーの共通点

- ・マイクロヒストリーとグローバルヒストリーの共通点は、研究の時間的なスケールを短期間に制限し、共時的な関係性に焦点を当てること。フランチェスカ・トリヴェットによれば、マイクロヒストリーの本質的な特徴は、不可避的に共時的なアプローチを取ることである。マイクロヒストリーは時間的な変化にともなう因果プロセスを特定することよりも、複数の現象間の相互接続を明らかにすることに興味がある。
- ・グローバルヒストリーは不可避的に共時的アプローチと結びつくわけではない。しかしながら、実践的な問題としては、「実在の」(‘real existing’)グローバルヒストリーは、トランスナショナル・ヒストリーや、比較史、交差する歴史(histoire croisée, transférgeschichte)の形を取っている。

#### ○集積としてのマイクロヒストリーの問題

- ・時間的な点においては、マイクロからグローバルへの「ズーミング」は、まったくスケ

ールを変化させていない。

- ・トニオ・アンドラーデによれば、マイクロヒストリーは「諸個人が生きた世界を眺めるためのカギ穴を形成する」。このような研究が「集まることで、ジグソーパズルのたくさんのピースのように、接続された世界の歴史が形成される」という<sup>9</sup>。
- ・だが、著者にとってこの見方は空想的である。マイクロヒストリーの集積から期待できるのは、せいぜいある瞬間の経験の束に過ぎない。
- ・マイクロなスケールの研究において、主体は行為主体性を有しているように見える。なぜなら、主体が従属している束縛や構造はほとんど見えないし、歴史家と主体との間の距離も共感的な親密さによって置き換えられるからである。
- ・だが、マイクロなレベルにおいて、行為主体性の成果が、問題となっている当の行為者の運命を越え出すことはふつう不可能である。さらに悪い場合には、ニコラス・パーセルが指摘したように、「たいていの人は、たいていの場合に、自分の行為主体性を構造を再生産するために用いている」。
- ・システムの強化を明らかにするマイクロヒストリーの集積というのは、控えめに言っても面白いものではない。実際、そのようなマイクロヒストリーが書かれることはほとんどない。
- ・歴史家たちは、「正規なる例外」や思考や行動を脱安定化し脱中心化する事例を追求している。しかし、このようなマイクロヒストリーにも問題が存在する。つまり、それらのうちのいくつかが重要であるにすぎず、多くのマイクロヒストリーは一貫した語りを生み出していないのである。

#### ○共時的な研究と通時的な研究の接続

- ・マイクロヒストリーのビネットで満たされたグローバルヒストリーは、行為主体性の幻想を与えて楽しませてくれるが、それ自体では、時間的な変化を説明するという歴史家が向き合わなければならない問題には対処できない。
- ・よって、「運命を決する出来事」(fateful events)ー構造を変えるような出来事(structure-modifying events)を特定する能力が必要となる。
- ・このために、共時的な研究は通時的な研究と接続しなければならない。マイクロヒストリーとグローバルヒストリーは、ともに時間的な変化の研究と接続する必要がある。この接続がないと、グローバルなマイクロヒストリーは一面的なものに留まり続ける。
- ・問題は、物語を選択する基準が不在であること。これを解決するためには、何らかの概念やモデルが必要であり、それらが社会理論に依拠することもある。

---

<sup>9</sup> Tonio Andrade, "A Chinese Farmer, Two African Boys and a Warlord", *Journal of World History*, 21, 2010, p. 574.

#### 4. ミクロヒストリー、マクロヒストリー、ナノヒストリー (pp. 32-36)

##### ○マクロヒストリーとナノヒストリー

- ・「スケールで戯れること」(‘playing with scales’)に、地理的、社会的なスケールだけでなく、時間的なスケールも含めるべきことを認めるのであれば、ミクロヒストリーはグローバルヒストリーだけでなく、長期持続の歴史とも接続する必要がある。
- ・このような歴史学は、理論や概念的な枠組みに依拠し、場合によっては周期的で長期間のタイムスケールに依拠する傾向がある。こうした歴史学を、著者は暫定的にマクロヒストリーと呼ぶ。
- ・多くのマクロヒストリーは、(個々の出来事としては) はかなくほとんど説明がない出来事を集積していく。たとえば、数量史(quantitative history)は市場の取引記録のように、文書史料に基づく小さなスケールの歴史的行為を観察するところから始める。だが、こうした文書記録はどれだけ簡潔なものであっても、人々が実際に集い、言葉を交わしたり金のやり取りをした現実の歴史的な出来事を記録している。
- ・このように、現実の歴史的な出来事に基づいており、文書史料の研究を必要とするが、ミクロヒストリーではなく、パターンや傾向や規則性に依拠する歴史学へとつながるタイプの研究を、著者は「ナノヒストリー」と呼ぶ。

##### ○異常値(outlier)の問題

- ・ミクロヒストリーとマクロ/ナノヒストリーは同じ問題を共有している。それは異常値(例外的なケース、極端な値、一見説明のできない出来事)の問題である。
- ・社会科学をベースにする歴史家がナノヒストリーに取り組み、規則性を発見して異常値を捨てるのに対して、ミクロヒストリーの歴史家は例外的な出来事の研究に魅力を感じており、異常値を捨てない。
- ・だが、例外的な出来事は、何らかのコンテキストに位置づけられるのでなければ、それ自体でミクロな研究を越え出る視点に導いてくれるわけではない。
- ・ミクロヒストリーが問題にしているのが断片と全体との関係性であれば、断片を解釈するための基準が重要となる。そうした断片は観察されていない他の断片と同じものなのか。どの程度、全体にとっての例を示すものなのか。それとも、異常値なのか。

##### ○理論の必要性

- ・歴史分析がどのようなスケールを採用するかは、歴史家が答えを与えようとする問いに依存している。
- ・だが、ミクロヒストリーの歴史家が例外的、周縁的出来事に魅力を感じ、社会科学をベースにする歴史家が異常値を捨て去る傾向があることは、問いというよりは史料から生じる歴史学の対をなす弱点である。

- ・奇妙な史料から出発するマイクロヒストリーは、失われた場所や時間を再現する歴史家の名人芸を披露し、これまでよく知られていなかった歴史的人物の例外性への驚きで読者を興奮させるかもしれない。だが、価値のあるマイクロヒストリーは、問題と取り組み、テーゼに対する挑戦をおこなう。
- ・そのために必要なのは、マイクロのレベルでの例外を、そうした史料の解釈を規律する何らかのモデルや理論と接触させることである。
- ・グローバルヒストリーとマイクロヒストリーを実り豊かに接続するために必要なのは、もっと理論に意識的になることである。このためには、厳格で機械的なモデルや考え方、往年の決定論的で抽象的な理論に批判的であるだけでなく、自らの実践の限界に対しても批判的でなくてはならない。